觀　　察

第八週

赤とんぼ

赤とんぼが出始めると秋の深さを感じる。赤とんぼ（赤卒）はあかゐんばとも言ふ。これは、みやまあかね、あきあかね、なつあかね、のしめとんぼ、しやうじやうとんぼ等の總稱である。一口に赤とんぼといつても種類のあることであり雌雄で色もちがふ（概して雌の方が黄色つぽい）ことを知つて置かう。これは捕へたら普通のとんぼとごこがちがふかをよく見せる。序であるが普通しほからとんぼのことをしほやとんぼと言ひ、しほやとんぼの雄をしほからとんぼ、雌をむぎわらとんぼと言つてゐる。ごの蟲でゞもそうであるが特にとんぼ等はにがしてやり度い。しかしとんぼは可成り特長があるから逃がしてからとんぼを畫かしてみると子ども達の觀察について知る爲の助けになるであらう。

紅葉とおちば

幼稚園のお庭の木々の葉が一日毎に色づくこの頃はその日毎の色づきを眺める味はひある樂しみがある。殊にあの大銀杏は全體が一日毎にちがつた姿で眺められる。その黄葉してゆくのを注意することには今日はごの位、あさつては七分通り黄になつたといふ樣に注意することと、ごれか特定の葉について紅葉の樣子を觀察することがある。後者については種々の方法もあるが色々な紅葉をあつめて大きな紙にそのまゝはりつけて側に葉の名を入れさせるのも遊びとして面白い一法。又布に置いてきぬたでたたき、色をそめるのも面白い法であらう。ぬりゑ等にすることも普通である。もみぢが落葉する理由は年長組で話す方が適當であらう。たゞこゝにわざわざ紅葉とおちばと別にした意味は兩者の意味がちがふ故である。

第九週

第十週

みのむし

これは誰でも知つてゐる親しみ深い面白い蟲である。昆蟲の仲間でみの蛾で鱗翅目の蛾に屬する。雌の成蟲も幼蟲も共にみのの中に棲んでゐて平時は決して外界に出て來ないこと、一種のアンテナの樣な役目の器官をもつてゐることなどその習性も中々に面白い。九月末頃、種々の木に小さい一糎位のみの蟲が澤山ついてゐる。それが此頃はもう大分大きくなり葉の落ちた木に下つてゐるのが目につく、外で遊んでゐる時ふとその一つをとる。注意してみのをさいてみる。中から出る裸蟲、驚いてゐる子ども達の目、そこでこの蟲は口から絲を出して木の葉と一しよにこんなお家をこしらへて入つてゐると話す。裸蟲の口をなでゝ引くと絲を出すのがみられる。そうして裸にされた可愛さうな蟲の爲に小さな箱の家と毛絲のくづをきざんでかけてやる。翌日には毛絲のあたゝかさうなみのをきてゐるであらう。マッチ箱に一匹づつ斯うして藏つた私達の幼い頃を思ひ出すなつかしい材料である。

じゆず玉

禾本科植物のジュズダマ、田舍には多いのにこんな遊ぶにいゝものが都會に少いのは殘念なことである。世話なしに育つものだから幼稚園のお庭の一隅にあつてよい。主に實を觀察させるわけである。みどりから茶色に、すつかりみのるとまつ白になる色の變化をみせその白い玉はつないで遊ぶ。白いのにエナメルで一寸模樣をつけるときれいな首飾りになる。おもちやの店を斯うした自然物を利用したものでもつと〳〵賑はせることが出來たらと思ふ。

第十一週

けいとう

秋らしいまつ赤な鷄頭も幼稚園のお庭に素朴な味をもたらせる草であらう。鮮やかな色をたのしまう。實をとり入れることを子どもと一しよにしたい。そして「この花は何に似てゐかしら」ときいてみたら子ども達は何と答へるか、こんな拙劣な問もこの花についてはしてみたい氣がする。

第十二週

霜

はじめて霜のおりた朝、寒い朝である。幼稚園のお庭の面やベンチなどの木の所が白い。恐らく今迄あんまり霜になど注意しなかつたであらう子ども達に霜といふものを、はじめておりた、はじめて寒かつた朝みせたいものである。

藤の葉柄

すつかり葉の落ちた藤棚の下はこのごろ毎朝澤山の細長い葉柄が落ちてゐる。ごみである。掃き捨てゐに何の躊躇もないものであるが、その丈夫な細い自然のひもはげぢ〳〵のおもちやになり、龜になり等して一日子どもの相手になつて呉れる。私達は太いところが藤の木についてゐた所、そしてこの兩側に葉つぱがついてゐた等話し乍ら子ども達と一しよにあんで遊ばう。

手技

第九週

自由畫　魚　二回

前週に魚の繪の鑑賞をすませて、この週自由畫として二回つゞけて魚をかゝせる。

粘土　自在　一回

製作　三回

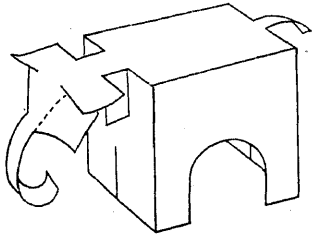
誘導保育案によるおもちややの品物つくり。

がてう

がてうを磨寫版などにて畫きて、きりぬかせ足のところに圓形の臺をつけて立たゝせる樣につくる。數羽つくつて小さい小屋などつくつてあしらふとよい。

象

出來上り圖の樣につくり頭は幼兒にかゝせる。



刀

心を新聞紙などをくる〳〵まいて途中刀の鍔をボール紙で